

対面交流のみが乏しい高齢者であっても1.4倍程度要介護・死亡リスクが高い可能性あり

愛知県の6自治体で2003年に、健康な65歳以上の高齢者を対象に郵送調査を行い、その後4年間にわたって要介護および死亡に至ったかを追跡した。年齢や治療疾患の有無などに関わらず、対面交流も非対面交流も乏しい孤立者だけでなく、対面交流のみが乏しい（電話等による交流はある）高齢者であっても、その後、約1.4倍要介護に、約1.5倍死亡に至りやすいことが明らかにされた。そのうえで、全国高齢者に対して推計したところ、対面交流のみが乏しいことによって、年間0.8万人程度の高齢者が要介護に、1.6万人程度の高齢者が死亡に至っている可能性があることが示唆された。

【問合せ先】 齊藤 雅茂（さいとうまさしげ）

日本福祉大学地域ケア研究推進センター・主任研究員

TEL：052-242-3075 FAX：052-242-3076

【研究方法】

2003年に愛知県知多半島の6自治体の健康な65歳以上の高齢者29,374名を対象に郵送調査を行った（回収率＝50.4%）。その後4年間にわたって回答者が要介護ないし死亡に至ったかを把握し、調査時点でADLが「自立」であった13,310名について分析した。

別居家族・親戚、および、友人と「会う頻度（対面交流）」および「手紙・電話・メールなどの頻度（非対面交流）」のいずれも「月に1、2回」以下を基準とし、「両方乏しい（孤立）」「対面交流のみ乏しい」「非対面交流のみ乏しい」「両方あり（非孤立）」に分類した。また、孤立者のうち、今の生活に満足している群（満足孤立）と満足していない群（不満孤立）を分類した。

		非対面交流	
		≤月1.2回	>月1.2回
対面交流	≤月1.2回	両方乏しい (孤立)	対面のみ 乏しい
	>月1.2回	非対面のみ 乏しい	両方あり (非孤立)
		生活満足度	
		不満足	満足
孤立状態	孤立	不満孤立	満足孤立
	孤立以外	非孤立	

【結果】

性別や年齢等を調整したところ、孤立だけでなく、対面交流のみが乏しい高齢者であっても、非孤立よりも1.37倍要介護リスクが高く、1.47倍死亡リスクが高いという結果が得られた。また、生活満足度の低い孤立だけでなく、生活満足度の高い孤立者であっても、非孤立よりも1.22倍要介護リスクが高いという結果が得られた。

これに基づいて、全国高齢者に占める実数を推計したところ、対面交流のみが乏しいことによって、年間0.8万人程度の高齢者が要介護に、1.6万人程度の高齢者が死亡に至っている可能性があること、同様に、生活満足度は高い孤立状態によって、年間1.3万人程度の高齢者が要介護に至っている可能性があることが示された。

	対面のみ乏しい		満足孤立
	要介護	死亡	要介護
相対危険 ¹⁾	1.37	1.47	1.22
曝露割合	3.7%	3.7%	11.0%
集団寄与危険割合	1.3%	1.7%	2.3%
実数(万人) ²⁾	0.8	1.6	1.3

【意義】

高齢者の健康維持にとって他者との対面接触が重要であり、介護予防においても電話等による安否確認よりも見守りや訪問活動の方が効果的であることが示唆された。生活に満足した孤立であっても健康余命へのリスクが高い可能性があり、そうした情報が孤立高齢者に対して適切に提供される必要と考えられる。

- 1) 性別、年齢、婚姻経験、治療疾患の有無、時間・場所の取り違えの有無、等価所得、居住地域を統制した。
- 2) 母集団(全国)の値として、2008年の新規の要介護認定者数(597,114名)と65歳以上の死亡者数(960,917名)に基づいて推計した。

学会発表：齊藤雅茂、近藤克則、近藤尚己、尾島俊之、市田行信、平井寛

高齢者の社会的孤立と健康余命との関連～交流形態の相違と生活満足度の高い孤立～. 第70回日本公衆衛生学会総会, 秋田, 2011年10月20日.